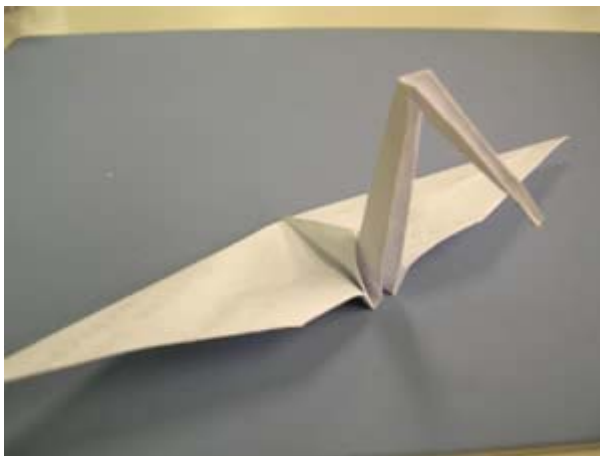


シンポジウム「名人の知を探る - 深い感性の情報学を目指して」(報告)

2006年7月5日、本学・国際交流会館・第一会議室に於いて表記シンポジウムを開催。芸術の諸分野でご活躍の三人の先生方をお招きしてご講演を拝聴。固定観念の殻を破り続ける発想の転換、という大変興味深い論点が皆さんの共通認識として議論されました。

「ものづくり教育」と題した最初のご講演で、鷺山靖先生はものづくりにおける素材の変化に基づく発想の転換の一例を提示されました。ゲームにおける「初めの形の美しさ」を標榜する私の目線に合わせてくださったのでしょ。本来、正方形の紙でつくる折り鶴を正三角形の紙でつくってみましょうという耳慣れぬチャレンジに参加者全員でトライしました。



これには、A4サイズの紙から最大面積の正三角形を切り抜くという頭の体操のおまけ付き。会場の皆さんがリラックスしてトライした成果、三角形折り鶴のいろいろな種類が登場。先生が意図された模範解答種のほかに、様々な新種が誕生し講演会の会場は創造の広間と早変わり。まさに本講演会にふさわしい場となりました。ものづくり教育に携わっておられる鷺山先生なら

ではの演出だったと思います。最後に美の追求の二方向性について簡潔に言及されました。(1) 既存のジャンルでもっと美しいものを目指す; (2) 今までにない新しいジャンルを創出する。また、美しいという意味世界としての「何々観」についても触れてくださいました。

「もの造りと思想」と題したご講演で、金正逸先生は造形作家として日頃の創作活動および作品の数々をご紹介くださいました。「切る (cutting)」という行為を芸術的創造性にまで昇華させるに至ったこれまでの経過についてお話いただきました。



それはまさに発想の転換の連続であり、固定観念を打破することの繰り返しだったように思われます。金先生の芸術家としての生き方にみられる、固定観念の殻を破り続ける発想の転換の原動力はどこから湧いてくるのか。30歳を過ぎてから家族を連れて海外へ留学し修業を重ねてきた蓄積によるものが大きいと思わざるをえません。土の力、土が本来持つ

性質、土とワイヤーといったつながりで、人の手では絶対につくり得ない新しい何かを求め続けてきたこれまでの歩みに私は圧倒される思いでした。そして今も作風が少しずつ変化なさっていると語られていたのが印象的でした。自分のこだわり、作品に作者の意志が強く出てしまうことの善し悪し、などなど究極の美を追い求めている芸術家のまなざし、決して妥協しない意志の強さと洩れることのない発想転換のエネルギーがほとばしる。金先生の美の探険家としての生き方と作品を通してまさに「芸術の力」を感じました。

「深い感性の表現」と題した朝倉桂香先生のご講演では、書における「字」、「墨」、「筆」といった素材を用いて、人のところに伝わる作品がどのようにできるのかについて、非常に簡潔ではありますが、その本質をわかりやすく語っていただきました。人の感じる敬愛、親しみ、心地よさが備わっている作品は、上手下手の域を超えて、何か尊いものを人のところに運んでくださる。気持ちがちにじみ出るような素朴な字(作品)は意識の範疇外のものであり、練習を積んだからといって到達できるかどうかわからない。そういった本当に深いところにある感性を師に学び、それを自分のものとして具現化することの喜び、さらにはそれをほかの人々へ伝承する芸術文化の姿をご披露くださいました。したがって、芸術作品は人と人のつきあいのように、敬愛、親しみ、心地よさがなくてはならないという朝倉先生の境地に至るのだと思います。固定観念も、言ってみれば、心のかたくなさの表れに過ぎない。透き通った心の前には固定観念の殻はもはや存在せず、素朴でまっさらな自分が作品として存在する。



各自が自身に委ねられた独創的世界の絶えざる発展を目指して多様性やゆらぎの表現を探究する際に生じる、芸術家としての魂の葛藤が名人の知を支える原動力であるかのように感じた次第です。人々に感動を与える芸術作品の原点を垣間見たようです。ゲーム場における作者と鑑賞者の知と知の相互作用から生じる深い感性は、芸術とゲームの密接な関わりを示唆するものだと思います。

先生方には、ご多忙の中、貴重なお時間を賜り、有意義な研究の場をご提供いただき深く感謝申し上げます。

平成 18 年 7 月吉日
飯田弘之

